

「〇〇してほしい」って言えるかな？

きこえない/きこえにくい子どもたちの意思表示支援と情報保障

筑波技術大学 白澤麻弓

1. はじめに

筑波技術大学は、日本で唯一の聴覚障害学生のための高等教育機関です。筆者は、こうした筑波技術大学で教鞭を執る傍ら、全国の大学で学ぶ聴覚障害学生を支援するネットワーク（日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan））の設立と運営にも携わってきました。本稿では、そうした活動を通して出会った学生たちの姿から学んだことを基に、「自ら必要な支援を求めていける子どもたちを育てるために、私たちにできることは何か」を考えていきたいと思えます。

1. 意思表示とは？

「障害者差別解消法」については、みなさんもよくご存じだと思います。この法律により、「合理的配慮の提供」が義務付けられることになりました。昨年4月からは、民間事業者にも法的義務が課されることになり、制度としては大きく前進しています。

しかし、この法律には我々が十分に認識しておかなければいけない重要な留意点があります。それは「障害者から現に社会的障壁の除去を必要としている旨の意思の表明があった場合において」合理的配慮を提供しなければならない、とされている点です。

これはすなわち、本人からの意思表示があっではじめて、配慮を提供する義務が生じるということです。逆に言えば、本人が黙っている間は、合理的配慮の提供義務は発生しません。周囲の人が、本人の様子を慮って「何か配慮しま

しょうか？」と声をかける義務はないということです。

さらに残念なことに、勇気を出して「合理的配慮をしてください」と伝えても、いつも話がスムーズに進むとは限りません。悪気なく、こんな風に言われてしまうこともよくあります。

- 「聴力もいいし、ロジャーで十分ですよ？」
- 「ゆっくりはっきり話すので大丈夫です」
- 「慣れている友達とペアにするので、それでいいですよ？」

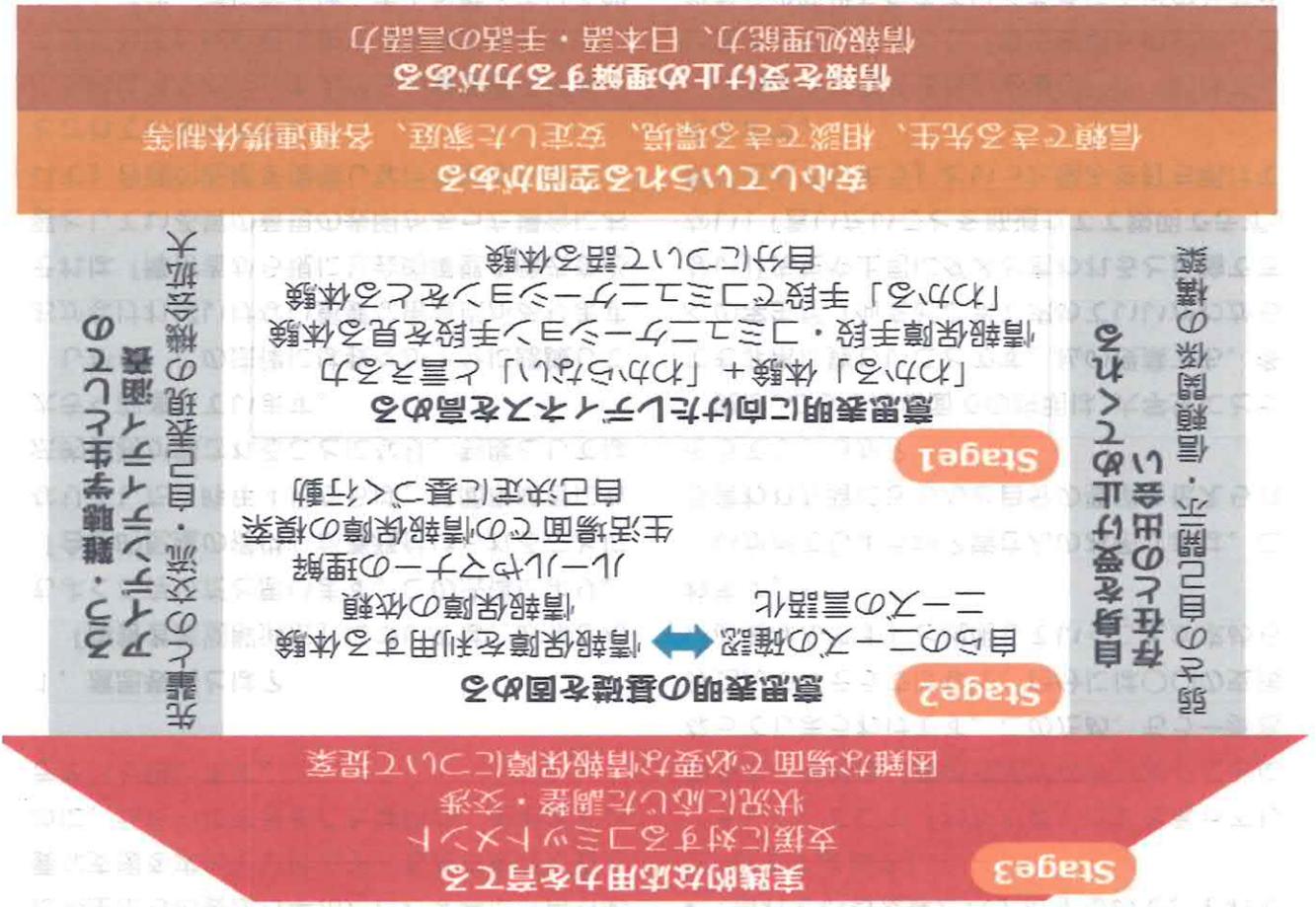
そして、ここで「わかりました」と言ってしまうと、それは「意思表示がなかった」ことになってしまうわけです。このため、もう一歩踏み込んで「そうではなく、自分には〇〇の支援が必要なんです」と説明していくことが求められます。

いかがでしょうか？皆さんのお子さまは、こう言われた時にきちんと自分の要望を伝えられそうでしょうか？

実は、こうした場面での説明は、大学生にとっても非常に難しいことです。私の授業でも、多くの学生が「何をどこまで求めていいかわからない」「先生や上司にダメと言われると反論できない」「言いたいことを筋道立てて説明できず、黙り込んでしまう」といった悩みを打ち明けてくれます。

このように考えると、必要な時に「助けて」と言える力、すなわち「意思表示」の力は、これからの時代を生きていくために不可欠と言えます。

図1 意思表明に必要な力と求められる働きかけ
日本聴覚障害者学生高等教育支援ネットワーク (PEPNet-Japan) (2017) 聴覚障害学生の意思表明支援のために
—合理的配慮に繋げる支援のあり方を—を基に筆者が作成



大規模な現行の自立支援の機能的な課題
聴覚障害者の存在を尊重する

聴覚障害者の存在を尊重する
「わかる」「言えない」

- 「わからなかったら聞きなさい」と言われても、どうせ一部しかわからないから、聞くだけ無駄だと感じている。

インテグレーションのお子さまに多い状況だと思いますが、心当たりはないでしょうか？このようなお子さまには、まず「わからない」気持ちに寄り添い、それを表明してもいいんだということを繰り返し伝えていくような働きかけができます。

①徹底的に「わかる」環境に身を置かせる

•安心できるコミュニケーションの確保：

まずはご家庭で、少なくとも保護者の方とお子さんの間では、常に完全に「わかる」コミュニケーション（手話、筆談などお子さんに合った方法）を徹底します。

•「わかる」空間を広げる：

親子間だけでなく、家族全員、そして学校へと、「わかる」コミュニケーションが取れる空間を少しずつ広げていきましょう。例えば、「食事中は全員で手話を使おう」「テレビには常に字幕をつけよう」といった家庭内のルール作りは非常に有効です。

②「わからない」気持ちを一緒に受け止める

•気持ちに寄り添う：

お子さんが「わからない」と感じた時、その気持ちを否定せず、「そっか、そこが分からなかったんだね」と受け止め、肯定してあげましょう。

•動く姿を見せる：

「どうすればわかるようになるかな？」と一緒に考え、学校に相談に行くなど、環境を作るために保護者が動いている姿を見せていきます。これにより環境が変われば一番よいですが、そうでなくても、自分のために動いてくれる人がいるということ自体が、「自分は一人じゃないんだ」と感じる強いメッセージにな

ります。

2) 例えばこんな子ども達②：わからなくても困ることがない

- 自分に入ってくる情報だけ理解していれば満足してしまう。
- わかっていなくても、周りの友達や先生が助けてくれるので、特に困らない。
- わかっているのかがどうか、自分でも曖昧になっている。

こちらは、ろう学校に多いお子さんのタイプかと思います。そもそもわかっているかどうか曖昧で、ちょっとマイペースなお子さんの場合、ちょっと厳しいかもしれませんが、時には以下のような働きかけが求められます。

①「わかりたい」気持ちを引き出す

•周りの発言がわからないと参加できない活動を取り入れる：

例えば、クイズやゲーム、ディベートなど、周りの発言をしっかりと聞かないと参加できない環境を作り出し、自分の身の回りの情報に目を向けさせるきっかけを作っていきます。例えば「私は誰でしょうゲーム」（出題者がヒントを出して、その人が誰かを当てる。発言がわからないときには、確認したり、繰り返し発言を求めたりしてもOK。ただし、他の人と同じ質問や答えを言ったら減点！）のように、人の話を正確に聞くことがクリアの条件になる活動が効果的です。

②わからないと「困る」体験をさせる

•責任のある役割を与える：

係の仕事やお手伝いなど、「ちゃんと確認をとらないと失敗する」ような、少しだけ責任のある役割を任せてみましょう。失敗した時に、「どうしてこうなっちゃったかな？」「最初にどうすればよかったかな？」と一緒に振り返り、どのタイミングでどんなふうに確認すれ

ほかかったのかを具体的に振り返り、次にうまくできるよう、聞き返し方を練習するの也很重要です。

3) 例えばこんな子ども達③ 聞こえが良くて、全部わかったつもりになっている

• わからない部分は無意識に想像で補っている
ので、話が微妙にずれることがある。

• 「よく聞こえるね」と褒められてきた経験から、今さら「わからない」とは言えず、聞き返せない。

幼いころにインテグレーションをしていて、ろう学校に戻ってきた子どもたちによくある傾向かもしれません。こうしたお子さんは、これまで体験で心に傷を負っていたり、「聞こえていく」と思うことで、自分を保っていたりする側面があるので、その気持ちを十分に受け止めて、つづ、わからない部分と向き合える気持ちを持つていていきたいですね。例えば以下のような関わりが考えられます。

①「わかる・わからない」の違いに目を向けさせる
• どんな場面であまりわからないのか？具体的に確認する：

• 会話が噛み合わなかった時に「今、どんな風に聞こえた？」「本当は△だったよ」というように、文章の中のどの言葉が曖昧だったのかを具体的に振り返り、「わかる」と「わかったもりの」の違いに気づかせます。また、どんな場面（騒がしい場所、早口など）で分かれづらいか、得意な音と苦手な音は何かを一緒に分析していくのも良いでしょう。
② わからないときに聞き返す練習をする
• わからないと表明できたことをほめる：
人の話を聞いていてわからないことがあっても、実際に聞き返すのはとても勇気がいることです。言葉にならない表情やしぐさであっ

ても、「わからない」サインを見逃さず、きちんと表明できたことを取り上げ、「よく気づいたね！」「聞いてくれてありがとう！」として、さりげなく褒めてあげましょう。

• 聞き返し方を一緒に考える：

2) でも話をしましたが、聞き返すという行為は意外と難しいものです。どのタイミングでどんな風に伝えれば、安心してコミュニケーションが取れるのかは、練習を重ねないとなかなか身につけません。このため、会話がすれ違うような場面があったら、その場面を例にとって、会話の流れを止めずに、かつ相手にも不快感を与えないような聞き返し方（例：「どうですか？」「もう一度いいですか？」「〇〇と一緒を考え、ロールプレイで練習しましょう。」）

• ロールモデルの存在も効果的

同じように聞こえにくさがありながら、上手にコミュニケーションをとっている先輩に出会うことは、何よりの学びになります。特に、ろう者のロールモデルは比較的に見つけやすいものですが、難聴者のロールモデルはあまり見つけられにくいと思います。

このため、同じような聞こえの先輩や先生で、お手本になる方がいたら、意識的に引き合わせ、あんな風に振る舞えばいいんだと具体的な目標を見つけてお手伝いをしてあげるとも大切です。

【ステップ2】意思表明の基礎を固める

【目標】：情報保障についての知識を持ち、「こらしてほしい」と伝えられる

ステップ1を経て、「わからない」ことを表明できる力が育ってきたら、次のステップは、情報保障についての知識を身につけ、自分に必要な支援を具体的に伝えられるようになることが重要です。

大学生を見ていると、自分が欲しい情報保障

の手段があっても、依頼の方法や利用する上でのルールを知らないことが良くあります。また、どんな情報保障でも「あればいい」と思ってしまい、手段ごとの質的な違いを自覚していない場合も多いでしょう。けれども、実際には、手書きノートテイクとパソコンノートテイクでは、情報量がまったく違いますし、パソコンノートテイクと音声認識による字幕も、質的や役割がまったく異なります。このため、以下のような体験を通して、自分のニーズの解像度を上げるとともに、利用する際に必要になる知識を育てていくことが重要です。

• **さまざまな情報保障手段に触れる：**

情報保障手段による違いを体感するためには、同じ内容を話した時に、伝わる情報がどんなふうになるかを比較して見るのが効果的です。一つの題材を基に、①手書きノートテイク、②パソコンノートテイク、③音声認識字幕、④手話通訳など、様々な情報保障を行い、自分はこの方法が一番わかるのか、どんな違いを感じるのかを体験してみるといいでしょう。

• **情報保障の質の違いを見る：**

情報保障の手段による違いとともに、同じ情報保障でも、担い手によって質に大きな違いが出る可能性があることへの理解も非常に重要です。ただ、ある情報保障を見たときに「わかりにくい」と思って、多くのお子さんは「自分の日本語力や手話力が低いからだ」と思ってしまいがちです。このため、聞こえない仲間と一緒に複数の情報保障を見比べ、印象を話し合うことで、自分自身の感覚に自信が持てるようになります。

• **自分で情報保障を担ってみる：**

多くのお子さんは、さまざまな情報保障を「見た」経験はあっても、実際に「やった」経験はないものです。このため、情報保障者がどんな準備をしたり、何に気を付けたりしながら支援を担っているのかを体感的に理解すること

に時間がかかりがちです。このため、字幕を見ながらその内容を文字や手話で伝えるなど、支援者の立場を経験することで、情報保障に対する理解につながります。

【ステージ3】実践的な応用力を高める

【目標】：場に応じて必要な情報保障を提案し、実現のために行動できる

最後のステージは、その場の状況に応じて必要な情報保障を自ら提案し、実現に向けて交渉・行動できる力を養うことです。こうした力を養うことで、希望通りの情報保障が用意できない場面であっても、他の代替案を提案したり、交渉場面で相手の事情を踏まえて話を進めていったりすることができるようになります。

最終的に、必要な交渉力を見につけるまでには時間がかかりますが、発達段階に応じたステージ3はあるので、現時点でできることを探していくといいでしょう。このためにできる働きかけとしては、以下のようなものがあるでしょう。

• **複雑な場面の情報保障をデザインさせる：**

運動会や学園祭、バスでの移動中、野外での活動場面など、一定の工夫をしないとうまく情報保障ができない場面があります。こうした場面をとりあげ、どんな情報保障をするのが効果的かを考えることで、今あるリソースを活用しながら、より良い情報保障を作り上げていく力を養うことができます。

• **交渉場面を想定したロールプレイを行う：**聞こえない子の多くは「落としどころを見つけるためのやり取り」が苦手です。「予算がないから難しい」などと言われると、すぐにあきらめてしまうことが多いようです。このため、よくある場面を想定しながら、グループで知恵を出し合い、相手の事情も考慮しつつ、自分の要求を上手に伝えていくような練習が必要になります。

・障害や社会的障壁についての確に説明するた

めの「ことば」を与える：

「合理的配慮」とは何か、「社会的障壁」とは何かを学ぶとともに、自分の困難さをわかりやすく説明するための方法を学習していきま

す。例えば、社会モラルの基礎となる「障害は、

きこえない」という障害そのもの（インパスマ

ント）と社会との接点に生まれる」という考え

方は、自分の置かれた状況を客観的に理解す

るために非常に有用です。また「メイクやス

ピーカーなど、世の中には健常者に対する配

慮であふれている」ことを知ることも、合理的

配慮を受ける自分を肯定的にとらえるために

重要でしょう。このように、さまざまな説明を

自分の中に取り込んでいくことで、次第に自

身の考え方も広がり、他者に対しても適切な

説明ができるようになっていきます。

子どもの成長を支える4つの要素

ここまで、「家モラル」の中央に描かれた3つのアナージについて説明してきましたが、これらの力が育つためには、土台や柱にあたる以下のような要素が不可欠です。

・土台：安心できる空間と言語力

何よりもまず、子どもが安心していられる環境（信頼できる先生、安定した家庭）が不可欠

です。そして、入ってくる情報を受け止め理解

していくためには、情報処理能力や日本語と手

話、両方の言語力が重要で、これらはすべての

基礎となります。

・柱①：ロールモデルとの出会い

聞こえない、聞こえないに＜い先輩が、自分の障

害を受容し、社会で生き生きと活躍している姿

に触れることは、子どもたちにとっての希望に

つながります。自分と同じような属性を持つ

ロールモデルとの出会いは、アイデンティティ

を確立する上で欠かせません。

・柱②：信頼できる「聞こえる人」との出会い

一方、聞こえない子どもたちが成長する上で

は、自分のことを心から受け止めてくれる「聞

こえる人」の存在も非常に重要です。家族はも

ちろん、信頼できる先生や友人と出会う、「あり

のままの自分を見せてもこの関係は壊れない」

と思える経験をすることが、社会へ踏み出す際

の大きな支えとなります。

そして、これらの土台と柱を支えられながら、

子どもたちは、アナージ1～3をちまようどらせ

ん階段を上るように、少しずつ上っていきます。

これは、決して一方通行の道のりではありませ

ん。例えば、一度「わからない」と言えるよう

になった子ども、新しい環境に入ると、再び言

えなくなってしまうことは大々あります。こう

した時には、もう一度アナージ1に戻ってし

てアナージ1を広げていく必要があります。そして、

アナージ1が広がったら、それに応じてアナー

ジ2→3も少しずつ広がります。逆に、下の段が

十分に広がっていかないければ、それより上の段を

安定して築くことはできません。1よりも大き

い2を作ることはできないからです。このため、

成長の各段階で、その子に見合ったレベルで各

アナージを作り、何度も行きつ戻りつしながら、

少しずつ、しかし着実に、「意思表明の力」を育

んでいくって欲しいと思います。

3. まとめにかえて

本稿では、合理的配慮が義務化されたこの時

代だからこそ、子どもたちに求められる力につ

いて、話をしてきました。今日お話ししたこと

が、すべてのお子さんに当てはまるとは限りま

せん。しかし、「うちの子の場合はどうだろう？」

と考える一つのきっかけになれば、これほど嬉

しいことはありません。聞こえないお子さんた

ちが、これから社会の中で存分に活躍してい

けるよう、私たちに何ができるのか、これから

も一緒に考え、支えていければと思います。